※評価委員会評価がs、a、b、c、dの評価のうち、ｂ（概ね達成）以下の評価項目（小項目）に対する反映状況を掲載

評価結果反映状況一覧
【令和４(2022)年度版】

評価項目（全体評価・大項目・小項目）		委員会評価の↑↓	評価における主な指摘事項 ＊小項目順に記載 【対象：Ｒ４年度(2022年度版)】	法人の業務運営等への反映状況（Ｒ５年度）	自己評価R5年度
大項目	**小項目** 評価委員会の評価がｂ又はｃであった項目				
1	19	c	（学生の英語力向上） 目標達成のため種々の具体的な対応がなされ、TOEIC 平均点を画期的に伸ばしたことを評価するが、目標値に達していないことから c 評価とした。	Accuracy科目（英語運用能力を高める科目群）とFluency科目（英語コミュニケーション能力を高める科目群）の開講により、バランスよく英語能力を高めるよう取り組んだ。 学生の英語運用能力の向上を適正に評価できるよう、第２期中期計画策定にあたっては、２年次修了時点での得点だけでなく、入学後からの伸び率等で評価できるよう目標値を整備した。	c
5	56	c	（科研費の申請率、採択） 科学研究費補助金の継続者を除く新規申請率は、昨年より上昇しているが、目標値に達していないため、 c 評価とした。 教員が研究にも力を注げる環境づくりを進めるとともに、学長と教員が大学として重点的に取り組むべき研究課題について意見交換するなど教員の視野を広げることも大切ではないか。	本学教員が研究代表者となっている科研費の申請率は、継続者を除いて49%（24人/49人）、採択率は33%（８人／24人）。 科研費申請・採択の促進策として、外部の科研費添削サービス使用の促進及び経費支援に加え、職員による添削を行った。 令和４年度の添削サービス利用者数は、個人申請２人、うち令和４年度中の採択者数は０人（令和５年に入り１人採択）だったが、令和５年度は法人契約により９人利用、２人採択となり改善が図られた。 引き続き、科研費を含めた外部資金獲得に取り組む。	c

大項目	小項目　自己点検・評価より評価を下げた項目				
1	4	↓b	（発信力ゼミの開講） 　計画では16 人程度での少人数クラスとあるが、20人程度での少人数クラスで実施しており、概ね計画を達成しているといい難いため、法人評価より低い b 評価とした。 　担当教員間において連携を密にして、授業を行い、本来の目的である学生のコミュニケーション能力や課題発見・解決能力等を養うことができた点は評価する。	前期「発信力ゼミⅠ」は17～18人（全14クラス）の少人数、後期「発信力ゼミⅡ」は12～19人（全15クラス）の少人数で開講した。	a
1	5	↓b	（グローバル教養ゼミの開講） 　グローバル教養ゼミという新機軸の少人数ゼミを企画したことは評価する。 　しかし、人数が少ないのが少人数教育とは言い難く、1名のクラスでは多様な視点からいろいろな意見を議論することができないと考えられるため、法人評価より低い b 評価とした。	１～10人のゼミを全９クラス開講した。限られた人数による密度の濃い場とすることで、専門分野以外の領域において、幅広くかつ深い学びの機会を提供することができた。	a
1	18	↓b	（英語運用能力向上のためのイベント等） 　学生の英語使用の機会提供として、英語でコミュニケーションをとる機会を設けた点は評価できるが、TOEICオンライン講座の受講者数が少ないままであり、法人の意義を学生に丁寧に説明し、受講生を増やす努力が必要と考えられる。以上より、法人の評価より低いb評価とした。	英語運用能力向上を目指し、TOEICオンライン講座や県内ALTを招待しての特別講演会、象山寮における英語での料理教室や映画を題材としたディスカッションイベントを開催した。また、IVE Program（国際バーチャル交流プログラム）への登録を行った。	b
11	92	↓b	（ハラスメント防止） 　ハラスメントの研修に対しての出席率が67.5%と、より高める必要があるため、法人より低いb評価とした。	３月に全職員対象に、弁護士を講師としたアカデミックハラスメントを含むハラスメント問題に対する研修を実施した。 　当日都合により受講できなかった職員にも録画配信による受講機会を設けることで、受講者数115名、受講率90.5%に向上した。	a